ヒキガエルは空を跳ぶ（仮）

マドル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒキガエルは空を跳ぶ（仮）

【Ｎコード】
Ｎ２５９５ＢＡ

【作者名】
マドル

【あらすじ】
人類はかつてからの夢であった電脳世界を創造し、そこへと没入することを可能とした。電脳民間警護稼業家に属する男、スコット・ウィルキンソンは自分の過去に嫌悪し、電脳世界にてその過去を清算しようと日々生きていた。しかし、一つの事件をきっかけに大きな事件へと巻き込まれていく。

1

ここはデストピアだ。所詮、０と１で構成されただけのおとぎの国。誘うウサギは死神で、落ちる穴には奈落の底。混沌の闇の先は光あふれる魔法の世界。嘘偽りで塗り固められた空虚な世界。笑顔あふれる地獄。誰もが主人公で、お姫様を助ける勇者で、愚弄な道化師。そんな世界を傍観してこう思う。ＳＦ／サイエンスフィクション／すっごいファンタジー／すっごいファ■ク／すっごいフーリッシュ／な世界だと。

人の夢は実現しつつあった。脳科学の進歩、そして、脳の電気信号を量子コンピュータの電気信号との互換を可能にする技術が開発され、人間としての意識をコンピュータ上で反映する事、及びコンピュータからの情報を脳が正常に受信し、認識して脳内で反映する事に成功した。コンピュータ上で架空の世界を作り出し、それを人に認識させることもできた。こうして、人類は初めて異世界へと飛ぶ事が出来るようになった。誰もが一度は夢に見た事があるだろう、おとぎ話のような夢のような世界に。

彼もまた、そんな世界に踏み込んで、足を踏み外した人間の一人だった。君は、これを読んでどう思うのだろう。一つの間違いで、大きな苦しみを背負った彼の事を。

空は蒼穹で満ち満ちていて、申し訳程度の雲が漂う。太陽は春の傾きを保ち、気温は熱くも寒くもない１８℃を保っている。柔らかな風が頬を撫で、あまりに心地よすぎて眠ってしまいそうなほどに。もし、これがリアルならどれだけ良かった事か。

俺の頭上を飛び回る飛行機も、俺の目の前の華やかなテキサスのヒューストンのビル街も、『モラルとお金は持っていよう！』という看板も、この憩いの公園も、俺の踏んでいる犬の糞も、それを見

てクスクス笑う人々も、全部が偽りなのだ。
　ここにいる人は確かに人だ。けれど、その中身はその姿の人物とはイコールが成り立たない。アバターと呼ばれる、この世界での自信の化身のような存在だ。かつてのオンラインゲームを想像すると分かりやすいかもしれない。その姿が現実のその人と同じ姿でないように、ここで靴底の糞を地面になすり付けている俺や、それを見て笑う彼らもまた現実世界の姿とは異なるのだ。俺の行動がおもしろかったのか、事の一部始終を見ていた誰かがコインを投げて寄こした。
　軽い金属音を鳴らしながら俺の足元に転がってきたコインもまた偽物の塊だ。手触りや臭いといったものが本物に似せてあるだけのものだ。だが、この世界では立派な通貨であり、全世界共通の通貨でもある。俺はコインを拾い上げると、刻まれている絵に目を移した。そこにはアインシュタインが繰り返し舌を出し、おちゃめな姿を晒している。現実世界ではありえない、動く絵だった。あり得ない事が当たり前のような世界がここにはある。それが、電脳世界なのだ。出来ればアインシュタインがこの世界に向けて舌を出していると信じたい限り。
　俺はそんなコインをポケットにねじ込み、噴水の縁に腰かけると、一人の男が話しかけてきた。
「なかなかのパフォーマンスだったぜ？」
　俺が睨むと、コインに描かれていたアインシュタインのように舌を出してごまかした。俺の仕事仲間である男――マイク・ヴァンは仕事仲間の間でも一番の気楽屋で、一番仕事に適していないと思われている人物である。大柄で、筋肉もそれなりについていて睨みをきかせばなかなかの威圧感を持つ。が、いつも真剣さに欠けていて、何事も楽観的に考える傾向があり、怠け者であり、俺たちが最も手を焼く人物である。
「仕事は……？」
「今は休憩なのさ。さっき、二人ばかしパクッてきたんだ」

「ほう……」
「なんだなんだその態度。俺だってやる時はやるさ。でなきゃ、給料が出ないんだし」
マイクは大げさに手を広げて肩を竦めて見せる。いつも大げさなのも彼の特徴だった。
「レベルは？」
「４だ」
「ペナルティは？」
「一人」
「よく抑えた方か」
「ちぇ、もうちっと褒めても良いんじゃないの？」
俺たちの仕事は現実世界での警察のような仕事だ。警察と一線を画すのは、民間企業、である事だ。近年では警察の人口が減少傾向にあって、犯罪の多いこの電脳世界には対応できない事が多々あった。その事から民間警察敵組織が創設されたのがきっかけで、最近では電脳警察とまで言われるほどに組織の勢力は大きくなりつつあった。警察と違い、小さな事から大きなことまでがモットーである俺たちは、犬の世話から家の警備、護衛まで幅広く活躍できることで売り出している。警察とは違い、すぐに対応してくれる、接しやすいなどの意見も多く寄せられ、一般市民の信頼においては警察は太刀打ちできないだろう。ここまでなら、どこにでもある警備会社や、ホームヘルパーの仕事と変わらないように思えるだろう。しかし、この世界における俺たちの主な仕事はもっと激しいものなのだ。
主な仕事の概要としては救出がそれにあたる。個人から発せられる、ＳＯＳ信号から位置を割り出し、可能な限り少ない被害で事件を解決する。この世界での事件はレベル別に大別され、強盗、殺人、強姦、ハッキング行為をレベル５に制定するといったように人への影響具合を基準として大別されていて、誰も死亡者を出さない事が求められる。誰かを護りきれずに死亡させた場合、ペナルティとして給料の額が下がるシステムとなっている。

「死ぬっつったって、実際に死ぬわけじゃあないんだけどなぁ」
彼の言うとおり、実際に死ぬわけではなくてアバターを失うだけ。アバター復活させるには、殺害された証明書を政府から発行してもらう必要がある。俺たちがその仲介役となって証言し、政府がサーバー管理者に問い合わせ、照合する。しかし、その際の審査に時間がかかる。それ以外に、新規でアバターを作る事も出来るが、その際には高額な課金量が発生することから、この世界の住民は殺害される事をひどく嫌う。
「まぁ、ＲＰＳで喜んでる俺とかよりはまとも、か。……なんとか言えよ」
ＲＰＳ――リアル・パーソナル・シューティングの頭文字。従来のＦＰＳとサバイバルゲームを組み合わせた現代の技術だからこそ生まれる事が出来たゲームだ。かつては戦争ごっこと言われ続けていた二つが、ここに来て現実としか思えないほどの壮絶な戦場と化している。まるで本物の銃弾の雨が降り、まるで本物の硝煙の臭いが鼻孔を突き、まるで本物の血なまぐささが頭に昇り、まるで本物の死が訪れる。と、マイクが熱く語っていた事を思い出した。
この世界での一般社会も現実と同じで銃社会だ。むしろ、この世界の方が実際のところ、凶悪事件が多いのだから、護身用として必ず持っておかなければならないツールとなりつつある。何故、銃自体を無くさないのかと問えば、依存としか言いようがない。今まではナイフに対して銃が使えた。今ではナイフで対峙しなければならない。電脳世界であっても犯罪の多い社会の中で、生き抜くにはあまりには不安ではないか。そういった銃への依存が規制できない理由、というのは表立った理由だと俺は思う。
実際の理由として、現実社会モデルとしての機能を期待されているが故だ。社会心理、犯罪心理、行動心理、行動経済など様々な分野の研究に大きな利益をもたらすとして。実際、どうなっているかとかは知る由もないのだが、それが銃を規制しない理由だと俺は思っている。より、リアルになるように。

「なんかさ、分からなくなってきたよな、実際さ。時々叫びたくなるんだよ、てめぇは現実と電脳とどっちが大切なんだってさ」
「……お前は」
「俺ぁもちろん現実だね。セックスした時の快感がこっちにゃあ無いし」
俺は半分あきれながらも、否定できずに肩を竦めた。彼の言っている事は事実だ。この世界には性的興奮という感覚がなければ、激しい痛覚もない。二つの感覚の電気信号を、この世界は持ち合わせてはいないのだ。その物質が持つ個々の感覚は手を通して信号化される。しかし、その電気信号もある一定の値を越えると抑圧され、脳へは届かない。これが、痛覚がない、と言える理由だ。最大の痛みは拍手した時の手の痛み程度。だから、どんなに怪我をしてもそれくらいの痛みで済んでしまう。だから、怪我をしても気づかなかったり、怪我をしても平気な顔をしていられる。どれだけ殴られても、どれだけ切り刻まれても、どれだけ撃たれても、この世界の人間は平気で笑っていられる。痛みへの恐怖はこれっぽっちもなく、あるのは殺害による時間の浪費への恐怖だけ。
「こっちにだって良い事はたくさんある。けどよ、やっぱ違うんだよなぁ」
更に続けるように何かを言いかけて、ふと黙った。視覚の右端に点滅するＳＯＳ信号。続いて位置情報が視覚全体に広がり、風景と重なるように透過して表示される。
「少し離れてる、か」
マイクは言うなり俺へと顔を向け、「稼げそうな輩なら大歓迎なんだがな」と嬉しそうに言いながら駈け出した。
そんな彼に呆れつつも、俺も急いで近くに駐車してあったバイクへと向かう。その途中でいつも思うのは、誰も死んでいなければいいのだが、という事。電脳世界であっても、誰かが息絶える姿は見るに堪えない。それが、俺とマイクの決定的な違いだと改めて自覚した。

自分がこの仕事に辿り着いた意味を今一度身に染み込ませ、自覚するように大きく息を吸い込み、吐き出した。常に新しい自分でいる事が、俺にとっては重要な事だった。

バイクにまたがり、エンジンの唸りに心を奮い立たせてアクセルを踏み、道路へ出て軽快にマイクを抜き去った。マイクの驚いた顔がサイドミラーに映る。マイクの叫び。

「あるなら早く言え！！」

2

一枚絵のようにしてその町はたたずんでいた。誰かが住んでいるはずの家に誰もいない。誰かが経営しているはずの店に誰もいない。現実でしか機能を果たさないものはこうして電脳空間では取り残されてしまう。まるで、ひとつの風景の飾りのようにして家が立ち並び、雑居ビルが並ぶ。その孤独に満ちた道路を重低音とともにマイクを後ろにのせて駆け抜ける。その時だった。右上の視界端に点滅していたＳＯＳ信号が一瞬消えたような気がした。俺は思わず目を見開き、体温を失っていくように体が、胸の奥が冷えていくのを感じた。信号が消えるということは、誰かが命を落としたということだからだ。誰かの心臓の鼓動が、意識が、存在が消えてしまったということだからだ。それはつまり、助けられなかったという事だ。だが、その次の瞬間に俺は再び目を見開いた。消えたはずのＳＯＳ信号が復活していたのだ。発信源はさっきと変わらない。発信者のアカウントナンバーも変わっていない。

「ＳＯＳ信号、一瞬消えなかったか！？」

マイクが声をかき消されまいと叫んで聞いてきた。彼も同じだったらしい。自分だけの間違いではない事に少しの安堵と、不安が募る。

「あぁ」

「やっぱそうか。こんな事は初めてだ……くそ、嫌な予感がするぜ」

「スピード上げるぞ。掴まれ」

「生きてくれてたら万歳なんだが、な。給料が下がるのは困るんだ。今月は両親の結婚記念日でね。プレゼントを買うための資金が必要なんだよ」

この仕事の在り方の違い。彼は金のため、俺は自分のため、どちらも他人ためになんてやっちゃいない。この仕事に就く奴らのほとんどは、助けようとして助けているわけじゃなかった。現実とは違

い、結局は顔も名前も本当の意味で分からない相手の事など気を使うわけがなかった。ましてや、救うという事に関しては。だから、彼のように金のために誰かを救うことだって間違っちゃいない事だ。
この世界は、人の本質がよく表れる世界だと言っても過言じゃない。誰もが自分の利益の事だけを考える。親切だったり、協力的である事の裏には、自分が攻撃対象にならないための防御的心理がある。
いつだって仲良くなれれば、いつだって切り捨てる事も出来る。残酷で容赦ない世界。その事にどれだけの人間が気づいているのだろう。
「あそこだ！」
マイクの声で我に返り、対象を確認して速度を落とした。バイクを道端に止め、ヘルメットをハンドルにかけてすぐさま対象建築物へと急ぐ。
そこは古びた教会だった。人気のほとんどない場所にあるそれは、異様な雰囲気に満ちていた。耳を澄ませてみても、物音は聞こえない。ハンドガンを手に、タイミングを会わせ、教会内へと突入した。
そして中を見た瞬間、驚愕に言葉を失った。
十字架に磔にされたキリストに似せるように一人の男性が磔にされていた。静寂の中、水の落ちる音が響く。その原因――男性の男根が切り取られ、地に落ちている。そこに大きな血だまりが出来ていた。
「なんだよ、これ」
呻くようにマイクが声を絞り出した。驚くべき事は、この光景だけではなかった。未だ、この場所からSOS信号が発せられているという事実だ。ここに、助けを求めている者がいる。視界の右上のAR（拡張現実）マップを確認する。SOS信号は、この男性ともう一人から発せられている。マイクがもう一つの発信源である、教会の奥の控え室へと入っていくのが見えた。俺は磔にされた男性のもとへと近づき、蒼く、血の気を無くした顔を見た。年齢でいえば

五十代後半だろう男性は、生気を無くした目を携え、自分の一部分を求めるように視線をそれに合わせているように思えた。ただのデータの塊、質感の無い肉体なのに、こうもリアルに映るのは自分が過去にとらわれているからなのか。無意識のうちに湧きあがってくる過去のイメージを振り払おうとして、首を振った。違う事に集中するべきだ、そう言い聞かせて男性のアカウントナンバーを企業のデータベースに問い合わせ、彼の役職を検索する。

「死んでる……はずだ」

確信できないのは、この世界故だ。電脳世界での死亡判定は実は曖昧な定義上にある。怪我の種類と危険レベルで判断され、確実な判断がくだされる一方、治療すれば生還できるかもしれない場合、障害レベルと出血シミュレータによる失血判断や、それに伴う身体機能の低下モデルによる生存可能レベルなど、様々なレベルにおいて確率が発生し、それを総合して死亡判断が下される。

この場合、一般人ならば誰もが死は確実だと思うだろう。しかし、この世界はあまりにも曖昧すぎる。全てがサイコロだ。だから、このSOS信号もまるっきり信じられないというわけじゃない。信じたくはないけれど。

「こっちにもう一人だ。女。服がはぎとられてる」

生死について、彼は肩をすくめた。それが、死を意味するのに時間は必要なかった。一瞬、イメージが脳裏をよぎる。この男性とシスターの取っ組み合い。暴力、立場の利用、強引な猥褻目的。全てが男性優位。

視界の右下に流れていた文字の羅列が止まり、必要としていた情報が光景を透過しながら目の前に映し出される。

「男の名前はエリック・カールソン。ここの神父だったらしい」

「女の方はオリヴィア・スミス。ま、シスターだったわけだが」

マイクが何かに気付いたのか、地面を見つめてしゃがみこむ。

「自殺か」

「確かに手にゃ銃を持ってた。が、実際は絞殺だろう」

「絞殺？」
私は思わず訊き返した。
「首に手の痕が残ってた。」
「どういう事だ」
「俺に訊くなよ。確かに、彼女が他殺なのだとしたらだ。こいつはどうやって仕立て上げられたのかってことが疑問なんだろう？」
マイクが神父の死体を見やった。神父の死は明らかに他人によって仕立て上げられたものだ。まさか、自分で釘を打ち、十字架にはりつけにするとは考えられない。よほどの狂信者でなければ。
「愉快犯かもな。こんなとんでもない事をやらかすんだから」
「犯人が他にいるなら、抵抗したはずだろう」
マイクが手招きし、向ってみると、十字架からそう遠くない場所に銃が落ちていた。
「抵抗した可能性はある、か。けど彼の死因はおそらく失血死だ。他に外傷もない。第三者が犯人なら、バレないで近づいて拘束した後、控え室に向かってシスターを殺害、そして神父をはりつけ、か。いや、でも銃は引き抜かれているから、バレているはず……顔見知りの犯行か？」
「いや、待て。確か……ナイフだ。控室に血のついたナイフがあったぞ。そいつは神父の男根を切ったやつじゃないか？」
「シスターが神父の？　つまり、シスターが神父を殺したと？　じゃあ、この現場をシスター一人が作り上げ、そして自分で自分の首を締めあげて自殺したって？」
「そんなに噛みつくなよ。俺にだって何が何だか分からないんだ。とにかく、その凶器についた血が誰の者かって事と、この教会に神父とシスター、そして俺たち以外に誰が入ってきたのかを調べてもらわない限りは真相は分からん。どっちにしろ、俺たちは要救助者を助けられなかった。減給は免れない事は分かっているが」
一人一人の行動は、ログアウト時に全てが記録される。ログイン時に何処で何をしていたのかが、所持している電子マネーのやり取

りがどのように行われたのかという全てがこのサーバーを管理する企業によって把握されている。もちろん、そこに個人情報も含まれているから、管理は厳重にされている。電子マネーが普及した今では、セキュリティ技術は昔に比べてはるかに進歩していると言っても良い。ただ、それに追随してハッキング技術も進歩している事は言うまでもない。護る物が発展すれば、破壊する物も発展する。表には裏があるように。

「ログが残ってるんだ。俺たちが真剣に考えたって仕方がないのさ。俺たちの仕事は要救助者の保護。それは失敗に終わった。俺たちの仕事は終わりだ、後は電脳警察と企業のやつらに任せておきゃ良い」

マイクが神父を見、俺もつられて神父の遺体を見た。未だに点滅を続けるＳＯＳ信号。微かに聞こえるアラーム音が、静寂に相まって不気味さを醸し出していた。

その時、ガタリ、と物音が控え室の方から聞こえた。俺とマイクがそっちへと顔を向ける。お互いに顔を見合わせ、銃を携えてそっちへと向かう。

≪誰かいないか確認しなかったのか≫

声なき声。電脳世界における一つのツールである脳内無線で、マイクに訊いた。

≪確認したさ！　けど、誰もいなかった、絶対に。たぶん、ネズミかなんかだろうさ≫

マイクは間違っている。この世界に野良はいない。いるのは飼いならされているという設定である動物のみだ。この世界に導入されている動物は全ての種類だ。それどころか、マニアたちの間では絶滅したはずの動物たちでさえも、それに似た動物たちにパッチでテクスチャなどを割り当てたりして、存在しない動物なんていないといえる。そして、動物たちは必ず誰かの所有物である事が前提だ。所有している間は確かに飼い放したりすることはできる。しかし、死亡した場合はその所有権も失われるから実質野良はあり得ない。また、動物たちにも野良的行動をするプログラムは組み込まれてい

ないはずだ。
　お互いが疑心暗鬼になりながらもドアを前に、タイミングを合わせて突入した。しかし、そこにあるのは形のいいバストをさらけ出した女性の遺体と乱雑に積まれた書物と古びたベッドだけだった。
≪ベッドを調べる≫
　そう言ってマイクがベッドへと近づく。ふと、寒気を感じた。気のせいだと思うが、一瞬だけシスターの遺体と目が合ったという感覚を覚えた。彼女の顔には怒り、憎しみ、恐怖、悲しみ、といった負の感情をごちゃまぜにしたような表情がはりついていて、俺はそれに恐怖を覚えて目をそらした。銃を握る手が汗ばのを感じ、荒くなりつつある息を整えるためにも大きくゆっくりと呼吸をする。
「異常なし、だ」
　そういって、机の近くに落ちていた本を手に取った。
「本が落ちたんだろう。そんなにびっくりする事ないさ」
　拾った本を適当なところで開く。埃が舞い、マイクがせき込んだ。顎に手を当てて読んでいたが、ほんの数秒で本を机に放り投げた。
「家の家系はキリスト教徒だけど、俺はそんなもんはどうでもいいって思ってる。神があーだのどーだの言うより、自分達の事をまずどうにかしなきゃならないからさ。家族が危険な目に遭ってるってのに、神は助けようともしないんだからな」
　胸の奥が疼いた。神は、俺を助けてはくれなかった。過ちを止めてはくれなかった。俺は、自分から過ちへと喜んで歩んでしまった。たとえ意図してなかった行動だったとしても、現実は容赦なく襲いかかってくる。
「あぁ」
　ここから早く出たかった。神によって自分の罪が救われるとは思えなかったし、思いたくもなかった。自分の事は自分でケリをつけるべきだ。そのために俺はここにいる。仕事をするために。自分を救うために。救われようとしてここに来たわけじゃない

3

控室を出るとすぐにマイクが肩に手をかけてきた。
「お前はほんっとに死体に弱いな。怖い？」
「そんなんじゃない。別に怖くもない」
「いやいや、お前の死体を見たときの顔といったらさ、いつも言うけど死体に負けないくらいに顔面蒼白なわけ。あ、電脳だからほんとに蒼白なわけないんだけど。で、だ。一つ俺が良い事を教えてやろう」
「なんだ」
「死体は動かない。安心しろ。どんなに願ったって動かない」
冗談の中に込められた真実を俺は嗅ぎ取った。彼は自分自身に言い聞かせているのだ。死体は二度と動かない、命を無くしたものは二度と戻ってこない。彼もまた死体を恐れているのだ。過去に囚われているのは自分だけじゃない。けれど、それが胸の奥底をひっかきまわしてくるような感覚がして、俺はただうなずく事しかできなかった。
「おいおい、まさかゾンビとか考えてるのか？　そいつは傑作だ。ありゃあな、架空の話だ。人が死んだ後に動き出すのが怖いなんて人に言ってみろ。笑われるだけだぞ？」
バサリ、と物音が控室からした。はっとなって銃を構えながら振り向いた。一瞬の間を置き、本の落ちる音が静寂を貫いた。
「置く場所がまずかったか」
苦笑いを浮かべながらマイクが呟いた。
「これがゾンビだったら笑えるな」
「やめてくれよ。もっと現実的に――」
ガタリ、と物音。その音に驚愕しながら音のする方に振り向いた。そこにあったのは神父がはりつけにされた十字架だった。
「おい、嘘だろ」

マイクが呆気にとられながらこぼした。それは俺も同じだった。次第に音は大きくなっていく。神父の体が痙攣したように激しく小刻みに震えだした。腕の筋肉が盛り上がるのを理解した瞬間、打ちこまれた釘ごと右手が自由を得る。次に左手が自由になった時、体のバランスを崩し、前のめりに倒れこんだ。両足にも釘が打ちこまれているから、地面に落ちる事はなく、筋肉組織がブチブチと切れる音を発しながら足の釘を軸にして体が宙づり状態になった。それでもなお、神父は自由になろうとして足の釘を引き抜こうとしている。そのたびに噴く血が体を伝い、体中が血みどろになっていた。

「……電脳でも、死体が動き出すはずがない。死亡判断が正式に認められれば、肉体のデータは消去されるはずだ」

マイクが後ずさりながら呟いた。その顔には少なからず恐怖がはりついている。

彼の言う事はもっともだ。しかし、神父の体は消去されない。それは視界の右上端に点滅するＳＯＳ信号が物語っている。即ち、それは神父が生きているという事を指し示す。しかし、見るからに神父は死亡判断を下されるような状態にいる。これはサイコロのいたずらなのだろうか。

ガタン、と控室のドアに何かが倒れこむような音がした。その音で、控室の向こうで何が起こっているのかをすぐに理解できた。向こうでも同じ事が起こっている、と。

木の割れる音がして、再び視線は神父の許へと引き寄せられる。死に体で無理やり足の杭を外した神父がぬるぬると地を滑った。大理石に透過したステンドガラスの色鮮やかなそこに、神父の血に濡れた体がするりと滑りこむ。さながら、胎児のようだった。

俺とマイクは目を合わせた。神父が正気を保っているとは思えなかったが、俺は一応彼に話しかけてみる。

「エリック。エリック・カールソン！　大丈夫か？　ここで何があった？」

近づく事はしない。彼に攻撃意思も手段もないと思うのだけれど、

それでも近づく事は憚れた。理由は、初めての感覚に体が怯えていたからだ。攻撃できるような状態でもない事を理解しているはずなのに、頭のどこかで彼が襲いかかってくるイメージがちらついているのだ。マイクの言葉を思い出す。ゾンビ映画はただの娯楽映画だ。だから、死体が動くなんてことは現実でも電脳でも起こるはずがない。そう頭で理解していても、こうも目の前の出来事を見ているとその言葉も意味を無くす。

再確認させられる。電脳世界は自由の世界だ。おとぎの国だ。奈落の底だ。この世界に、あり得ない事なんてありえない。

だから、腹の底に怒りが湧きあがる。あり得ない、と思い込んでいた自分はとんだまぬけだ。俺と同じような事をするやつはいくらでもいるのだ。俺は、一体何がどうなってこんな現象が起こっているのかを理解した。俺と同類が近くにいる。

「エリック。聞こえてるか？　エリック！」

マイクが呼びかける。彼が気づく事はないだろう。ここでどんな現象が起きているかを。それを俺は告げるつもりはない。同類は同類でカタをつけるべきだからだ。憎まれる理由を自分は持っている。だが、彼を巻き込むべきではないのだ。

神父が血に濡れた体を這わせる。その時、一瞬だけ目が合って俺は息をのみ、本能のままに銃を構えた。

神父の目は生きた目そのものだ。さっきまでの虚空を見つめるそれではなく、助けを請うような目をしていた。死者に助けを請われるなんて悪夢そのものだ。死んだものを助ける事なんて出来やしないのに。

神父は少しずつはっていき、自分の男根には見向きもせず払いのけながら進んでいく。

「あいつ、まさか」

マイクが何かに気づいた。しかし、それも遅く、神父は落ちていた自分の銃を右手に握り締めた。焦りを惜しみもなく顔に出しながらマイクが銃を構えながら叫んだ。

「エリック！　そいつを置け。その銃を置くんだ！！」
マイクがどれだけ叫んでも、神父が従う気配はない。威嚇射撃をしようと構えなおした瞬間、再び視線が交錯した気がした。ゆっくりと右腕が持ち上がっていく。
「やめるんだ、エリック。君が俺たちに危害を加えると言うなら、俺たちもそれなりの対応をしなくちゃいけない。分かってるのか！」
と、視界の端で何かが動いた。本能的に危険を察知し、マイクの肩を掴み、引き寄せた。自然と控室へと視線が向く。思わず目を見開いた。控室のドアが腕一つ分ほど開いており、そこから青白い手が銃口をこちらへと向けていた。次の瞬間、マズルフラッシュと同時に頬の肉が裂けて血が散ったのを感じた。
マイクを長椅子の陰に押し倒し、俺も射線から逃げるように倒れこんだ。
「くそが……ホラー映画も真っ青だ！」
「ホラーというか、どちらかというとパニック映画だろう」
相手の位置をＳＯＳ信号の発信源を頼りに把握し、手だけを出して発砲してけん制する。
しかし、彼らがそれで踏み止まることはない。
相手は一心不乱に撃ち続けてきて、長椅子が少しずつ削られていく。相手が近づくごとに俺たちに逃げ場はなくなる。彼らの弾切れと俺たちのどっちが尽きるのかを比べると、距離的、残弾数的に考えれば後者の方が早いだろう。
「くそ、冷静に反応するなよ！」
マイクがほふくで長椅子の反対端へと前進する。考えている事は同じだった。後はタイミングを合わせるだけ。
「Ｇｏ！！」
マイクの号令とともに意を決して飛び出した。銃口が俺をとらえる前にシスターの銃身の下に左手を、右手を手首に置き、右手を引いた。シスターの手首が無理な方向と曲がり、指で銃を握っていられず銃を落とす。腹に一発拳をブチ込み、左腕をとった。一瞬、マ

イクと神父が視界に映る。マイクが銃を奪うのに失敗し、蹴り飛ばされたのが見えた。考える間もなく、無意識のうちにシスターを盾にした。次の瞬間、神父が銃を構えた。しまった、と思った時にはもう遅い。神父に躊躇いなんてあるはずもなく、血のはりついた指で引き金を引くのが見えた。パン、と音がした瞬間、腹に『鈍く鋭い痛み』を感じた。シスターと一緒に崩れ落ちる。

俺は愕然とした。痛みを感じる。抑制された痛みでも何でもない、本物の痛みがこの腹に響き渡り、波打っている。この世界の定義が崩れ落ちていた。この世界で痛みを感じるはずはないのだ。痛みは不要因子としてこの世界の概念から削除されているはずだ。これほどまでに痛みを感じるはずはないのに、どうして。

「失敗しちまったすまねぇ」

はっとしてマイクを見上げた。気づけば自分の息は荒く、冷や汗も流れ出ていた。

「神父は？」

マイクが顎で指し示す。神父は前のめりに倒れ、出し惜しみもなく血をぶちまけていた。これほどまで人間は血を蓄えていたのかと思えるほどに。

視界の右上のＳＯＳ信号が二つとも消えている。二人は死んだ事をこの世界が完全に判断したのだ。

「意外にしっかりと握っていやがった。おかげで銃を使うはめになっちまった、まったくなんだって……どうした？」

俺の反応がおかしいと感じたのか、マイクが心配そうな顔で覗いてきた。俺は咄嗟に大丈夫だ、と告げて彼をけん制する。腹が血まみれだったが、シスターの血だという事は分かっていた。痛みが走らないようにゆっくりと立ち上がる。腹を思わず見てしまう。はらわたを食い千切ろうと勇んで飛び込んできた銃弾は防弾チョッキに阻まれ、むなしく地に跳ねた。

思わず、笑いだしそうになった。それを無理やりに抑え込む。笑うな。笑うな。笑うな。死を、笑うな。

「死人の復活、か。ここにはお似合いの現象ってこった」
キリストの復活とは大きく異なる雰囲気だったが、とマイクが苦笑い混じりに付け加えた。なるほど、と俺は一人ごちる。犯人は、わざとここを選んだのかもしれない。キリストだって、復活した時はこうだったのかもしれない、朽ち果てた体を動かしていたかもしれない、それを誰かが美化しただけの話なのかもしれないという事の体現。
そこで、俺は犯人が近くにいるかもしれない事を思い出して走った。マイクが叫んだ気がしたが今はそれどころではなかった。ドアを開け、さびれた町中へと飛び出した。誰一人として人はいない。観光地でも都市でも無い場所が過疎になることは珍しい事ではない。結局必要とされるのは人にとって注目されるべきものを持つ場所だけであって、どこにでもあるような風景や土地柄は注目されないのだ。こうして過疎した場所は人っ子一人いやしない。犯人さえも、だ。
「何だってんだ、急に走り出して」
マイクが遅れてついてきた。
「いや……なんでもない。ただ、外の空気が吸いたかっただけだ」
表情を読まれないように、振り向かないで返事をした。
「くそ、最悪だぜ。意味がわからねぇ現象に遭うし、要救助者は撃ち殺しちまった。減給は馬鹿にならんだろうし、下手すりゃクビだ」
そう悪態をつきながら、マイクは電脳警察へと協力を要請した。少しして、電脳警察の人間が来て、この場所の捜査を頼んだ。後は、俺たちに出来る事はなく待つのは上からの処罰だけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2595ba/

ヒキガエルは空を跳ぶ（仮）

2012年1月6日17時46分発行